

# 千手観世音菩薩立像

せんじゆかんせ おんぼさつりつそう

## 【千手観世音菩薩立像】

田中 保晴

虎目石は、キャッツ・アイ効果（表面に一方の光の筋が浮かぶ）により、見る方向や光の当て方によっても雰囲気が変わる。その特性を好み、表情を出しやすいと考える田中は、多くの作品に虎目石を使用している。

立像・光背ともに虎目石を用いて美しい曲線を効果的に表現した千手観世音菩薩立像は、制作に半年ほどかけ、100ほどのパーツの石を貼り合わせる技法によってまとめ上げた。『型にはまらない』作品を作り続ける、田中ならではの逸品と言えるだろう。

「観音の顔はもちろん、手の表情も見て欲しい、そして何よりも『好きだ』と思ってもらえたら」と語る田中の口調は情熱に溢れ、作品と真摯に向き合っている姿勢がうかがえる。



【サイズ】 高さ約70cm × 幅約60cm

【素材】 虎目石、水晶

伝統工芸士

# 田中 保晴

## Vol. 18

2019年9月発行

craftsman jewelry file.18  
yasuharu tanaka  
2019 September

craftsman jewelry

Introduction of works



## 山梨ジュエリーミュージアム

山梨県甲府市丸の内1-6-1 山梨県防災新館1階  
<https://www.pref.yamanashi.jp/yjm/>  
開館時間：10:00～17:30(最終入館17:00)  
休館日：火曜日(祝日の場合はその翌日)、年末年始、その他、臨時に開館・休館することがあります。  
入館料：無料  
駐車場：92台 山梨県防災新館地下有料駐車場(来館者は1時間無料)

山梨ジュエリーミュージアム発行



## カエルの子はカエル

水晶彫刻を業としている家に生まれた田中にとって、小学校の頃から彫刻は遊びの1つだった。家業を継ぐことを強制されることはなかったが、田中は高校卒業後伝統工芸士の父の元で働き始めることに、なんのためらいもなかった。

一般的には、高校卒業後初めて水晶彫刻の世界に入ると、師匠の指導を受けながら灰皿など簡単なものの制作から始め、10年ほどかけて技術を習得していく。しかし、幼少期から彫刻に慣れ親しんでいた田中は、既に自分の作りたい作品を制作できるだけの技量を身につけていた。

就労後も、師匠である父に「これしろ、あれしろ」と指示されたことはない。必要な技術は全て、自分の目で父の作業を見ることにより学んだ。

## 自分が作りたいものを形にするために

田中が働き出した当時は、唐美人の置物が全盛期だった。山梨の水晶彫刻の職人はこぞって唐美人を制作し、外国人に販売することで収入を得ていた。しかしながら、父親の元で働いていた田中は生活の心配をする必要がなかったため、自分の好きなものを好きなように作ることができた。

皆と同じものを作ってもつまらない。田中が選んだものは観音像だった。平安期に生まれた寄木造りの技術で作られた繊細かつ優雅な観音像に魅せられ、それを水晶彫刻で再現するために、それまで水晶彫刻の世界ではタブーであった接着材で石と石とを貼り合わせる技法を取り入れた。

片手で石を持って長時間作業するため、一つの石から彫り上げる作品の大きさは限られてくる。しかし、貼り合わせの技法により、大きな作品を作ることができるようになり、また、寄木造りで表現されるような観音像の細かい造形も表現できるようになった。

生活の糧としてではなく、自分の作りたい作品を制作する田中は、彫刻への情熱も人一倍熱く、寝る間を惜しんで日々作業に没頭した。その結果、高校を卒業してわずか1年後には、田中が貼り合わせ技法により制作した観音像は、山梨県水晶美術彫刻協同組合主催の第11回水晶彫刻新作展で山梨県知事賞を受賞した。

想いをかたち

— 変わらぬ情熱を抱き続けて —

## 「世界にただ1つ」にこだわって

創作活動としての彫刻の道を邁進してきた田中も、独立し自身が弟子を持つようになると、否応なく商売としての彫刻の比重が高くなっていく。しかし、田中の創作意欲は絶えることはなかった。商品としての作品を作り自ら売り歩く生活の傍ら、自分の作りたい作品を作り続けた。

同じものを2個作っても面白くない。自分の作る作品は全て世界で1つだけだという思いで、観音像だけでなく、これまでの水晶彫刻では作られたことのない大型の五重塔や宝船、人の背丈ほどもある念珠など斬新な作品を手がけていく。採算を度外視した作品は、時として人からは理解されないこともある。「こんなものを作って誰が買うの?」と。しかし田中は、売るために作ってはいない。自分にしか作れない、「田中保山(田中の雅号)の一品」を作っているのだ。

## 人を呼べる彫刻作品 そこから広がる甲府の未来

田中は、70歳になったら商売のための彫刻はやめ、自分が作りたい作品を好きなだけ作る日々を送るつもりだ。そこには、芸術としての水晶彫刻を更に極めたいという、年を重ねて増した創作への情熱が強く感じられる。それと同時に、甲府と甲府の水晶彫刻業界の今後にも思いは募る。自分らしい作品を更に多く制作することで、それを見たいと多くの人が甲府へ集まれば、甲府の活性化の一助になれるのではないかと、熱い想いを口にする。

“宝石の街甲府”が新しい輝きを放つために、自分に何ができるのか。田中は常に前を見続けている。



craftsman jewelry

Vol. 18



田中 保晴(たなか やすはる)  
甲州水晶貴石細工伝統工芸士  
やまなしの名工(山梨県知事表彰)  
有限会社 工房田中 代表  
有限会社 工房田中  
甲府市徳行2丁目10-3  
Tel:055-228-6806